

1. 現地で行った「多良間島の星名伝承に関する調査」に関する天文民俗学的データの整理・分析

(1) 調査の概要

2022年10月21日～23日、沖縄県宮古郡多良間村において多良間村教育委員会に助言をいただき、次の話者に聞き取り調査を実施した。22日、23日には宮古島出身の友利健氏に方言のご教示をいただき、記録を実施した。なお、()内に伝承者名を記した。公表の際、個人情報に配慮して記号の表示のみとする。

- ・沖縄県宮古郡多良間村塩川字津川区、HA(浜川春子)さん、昭和16年生まれ。塩川出身
- ・沖縄県宮古郡多良間村塩川 NO(野原博)さん、昭和16年生まれ、塩川出身
- ・沖縄県宮古郡多良間村仲筋 OT(大城たかお)さん、昭和29年生まれ 仲筋出身
- ・沖縄県宮古郡多良間村仲筋 MI(宮平行夫)さん、昭和5年生まれ、MF さん(MIさんの妻)、昭和10年生まれ

(2) 記録した星名

① 多良間村塩川

- ・明けの明星…シェーカブス (HA 浜川、NO 野原)
ユアキブス (HA 浜川)
 - ・宵の明星…ユイ°フーブス(NO 野原)
 - ・プレアデス星団…ム°ニブス(NO 野原)、ムリブス(HA 浜川)
 - ・オリオン座三つ星…タタキイ° (NO 野原)
 - ・おおぐま座 α β γ δ ϵ ζ η (北斗七星)…ナナツブス(NO 野原)
シャッシブス(シャッシ:柄杓) (NO 野原)
 - ・こぐま座 α (北極星)…ニヌパブス(HA 浜川)
 - ・流星…ナガリブス(NO 野原)
 - ・天の川…ティンヌム°ジュ(ム°ジュ:溝) (NO 野原)
- ②多良間村仲筋
- ・明けの明星…シェーカブス (OT 大城、MI 宮平)
ユーアキ(ふつうはシェーカブス(MI 宮平))
 - ・宵の明星…ユイ°フーブス (OT 大城、MI 宮平)

- ・プレアデス星団…ムリブス(OT 大城)、ム°ミブス(MI 宮平)
- ・おおぐま座 $\alpha \beta \gamma \delta \epsilon \zeta \eta$ (北斗七星)…ナナツブス(MI 宮平)
- ・こぐま座 α (北極星)…ニヌバブス(MI 宮平)
- ・流星…ナガリブス(OT 大城)、ナガレブス(MI 宮平)

大城氏は、八月踊りのなかにクガニミツブスが唄われていると教えてくださったが、クガニミツブスがオリオン座三つ星を意味するとは伝えていなかった。

(3) 話者への聞き取りの実際

各々の星名について、次のように話者に確認を行なった。

- ① 多良間村仲筋 MI(宮平行夫)さん(昭和5年生まれ、仲筋出身)、MFさん(MIさんの妻、昭和10年生まれ)

- ・プレアデス星団の星名ム°ミブスについての確認

MI「あれはム°ミブスと言って。群れをムミといいますから」「東のほう」「うごくみたい」

北尾が「いくつくらいかたまっています？」と尋ねると、MI「ななつぶすですけど」

MF「ム°ミブス、ななつ」という答えがかえってきた。プレアデス星団を意味する。

- ② 多良間村塩川 NO(野原博)さん(昭和16年生まれ、塩川出身)

- ・オリオン座三つ星の星名「タタキイ°」について確認

「タタキイ°」について、「どういう意味ですか」と尋ねると、「叩くことですね」という答えが返ってきた。「3つの星がなぜ叩くなのでしょうね？」と尋ねると、「それはわからない」という答えが返ってきた。「先輩が、多良間のことばではそれはタタキイ°というんだよ」と言い、それを学校の先生がオリオンだよと教えてくれた。

- ③ 多良間村仲筋、OT(大城たかお)さん(昭和29年生まれ、仲筋出身)

- ・ユイ°フーブス。ユイ°:夕飯、フー:食べる。ブス:星

2. 調査データから、今回の科研の目的に沿った天文民俗・天文考古および認知天文学的な分析・考察

(1) 1984年実施のアンケート調査との比較

多良間村については、1984年アンケート調査を実施した。そして、次のように「アンケート調査による南西諸島の星の民俗」『天界第706号、1984年3月』(東亜天文学会)に記した[1]。

- ・明けの明星…シェーカブス
- ・宵の明星…ユイフーブス
- ・プレアデス星団…ムニブス

・北斗七星(おおぐま座 α β γ δ ϵ ζ η)…ナナツブス

・北極星(こぐま座 α 星)…ニヌハブス

・流星…ペードゥリブス

以上の星名のなかで、ペードゥリブスについて、今回の現地調査で出会った話者に確認したが、全員聞いたことがないという答えがかえってきた。今回の現地調査では流星は、ナガリブス、ナガレブスであった。

また、アンケート調査で記録できなかった下記の星名を今回の現地調査で記録することができた。

・オリオン座三つ星…タタキ[°]

・おおぐま座 α β γ δ ϵ ζ η (北斗七星)…シャツシブス(シャツシ:柄杓)

(2) 天文民俗・天文考古的な分析・考察

① 多良間島に伝わるニ一りに唄われた星の出

『宮古島旧記並史歌集解』には、与那覇勢頭(よなはせど)が秋の四辺形、プレアデス、アルデバランとヒアデス星団でつくるV字形、オリオン三つ星、明けの明星ののぼるのを見て蘇って与那覇勢頭豊見親(よなはせどとうゆみや)になって宮古を治めることになったという「与那覇せど豊見親のに一り」(ニ一り(神歌))が掲載されている[2]。

寅の方ゆ見いりば

あがるなゆ、見いりば、

(寅の方則ち東を見ているとの意)

ゆしやすみやーや、

きんたてい、うりが

あとからや、

(「ゆしやすみや」はペガス星座(ママ)のこと、「ゆしやす」は島語で屋敷のこと、ペガス星座(ママ)の四つ星を指す、「きんたて」は四隅の柱を立て、家建てすること、即ちペガス星座の四ツ星を見て、その後からはの意)

んみ星(ぶす)ばあがらし

うりがあとからや

(「んみ星」はスバル星群(むれ)のこと、「んみ」は群れ(むれ)の意、「八んみ」「十んみ」は八の群、十の群の意)

むい星(ぶす)ばあがらし

うりがあとからや

(「むい星」は駟者座星群のこと、「むい」は箕(み)のことで駟者座星群の形が箕に似ているから言うのである)

(北尾注:アルデバランとヒアデス星団でつくるV字形を箕に見立てた事例がある[3]。馭者座とみるよりも星の出の順番からもアルデバランとヒアデス星団でつくるV字形の方が適切と考える)

た一きゆみや上らし

うりがあとからや

(「た一きゆみや」星は不明)

(北尾注:「た一きゆみや」については、今回の調査によりオリオン座三つ星であると確定できた)

うぶらく一ら、あ

がらし、うりがあ

とからや

(「うぶらく一ら」又「うぶらうさぎ」は明けの明星のこと、語彙は不明 最後に来る者、しんがりする者にも「うぶらうさぎ」という)

秋の四辺形のペガサス座 γ の出からプレアデス星団(おうし座 η)の出まで約3時間13分である。(宮古島、1900年の場合) 一方、プレアデス星団の出からオリオン座三つ星(ζ)の出までで約2時間48分である。仮に「むい星」がアルデバランとヒアデスのV、「た一きゆみや」がオリオン座三つ星と考えると、秋の四辺形の出からプレアデス星団までの出までの間隔は、プレアデス星団からアルデバランの出(約1時間8分)、アルデバランからオリオン三つ星の出(約1時間40分)それぞれの星の出の間隔に比べて長く、「うりがあとからや(その後からは)」というように後から続いてのぼるからといえる間隔と言えるかどうか微妙である。しかしながら、「むい星」がアルデバランとヒアデスのV、「た一きゆみや」がオリオン座三つ星と考えると、プレアデス星団以降の星の出の順は、まさに「うりがあとからや(その後からは)」という表現そのものである。ニ一りに唄われている「た一きゆみや」がオリオン座三つ星と考えたのは、星の出の順番とともにオリオン三つ星の波照間島の星名「タタスイブシ」、久米島の星名「タテイブシ」の響きに通じたからでもある。しかし、今回の現地調査までに多良間島、宮古島に「た一きゆみや」に通ずる星名を記録することはできなかった。

ところで、稲村賢敷氏によると、このニ一りは、初めは本島(北尾注:宮古群島のなかで宮古島を本島と言ったと思われる。[4]参照)にも広く歌われていたようであるが、今は多良間島に粟摺りうたとして残っているだけで、平良や下地々方には其の四二節以下だけが僅かに歌はれているに過ぎない、その曲節は非常に簡単で軽快であって、祭の時神前にうたはれたものとは思われないとある。

多良間村塩川字津川区のHA(浜川春子)さん(昭和16年生まれ)は、農作業を終えて木陰でおばあが歌うのを幼いときから聞いていた、と語ってくれた。稲村氏の「初めから労働歌として一般にうたわれたものであろう」という指摘に同感である。

今回の現地調査で、オリオン座三つ星の星名「タタキ \circ 」を記録したが、伝承者は塩川の野原(NO)さん1名であった。ところが、多良間出身の渡久山春英氏(とくやましゅんえい)氏が宮古毎日新聞2017年4月27日に、「オリオン座の三ツ星は『タタキ \circ 』」と記していた。また、『南琉球宮古語多良間方言辞典』に次のような記述があった。

・たたき [tataki][名][たたき°まい...。たたき°まい...]オリオン座の三つ星。
(「i」は、アクセントのピッチの下降を意味する)[5]

稲村賢敷氏によると、『たきゆみや上らし』(『たきゆみや』星は不明)とあった。ところが、「タタキイ」(塩川のNO(野原)さん伝承)と渡久山春英氏による「たたき」がオリオン三つ星の星名であることにより、『たきゆみや』はオリオン座三つ星であると確定できたと考える。

② 「与那覇せど豊見親のにーり」のふるさと

星の出がさいごに唄われた「与那覇せど豊見親のにーり」は、「むいか越(ぐす)与那覇(ゆなば)よ」からはじまる。稲村賢敷氏によると、むいか越は地名で平良市東仲宗根にある「むいか井(があ)」という洞窟井の付近をいうとある。(写真下)



「与那覇せど豊見親のにーり」は、多良間島でしか歌われていなくなった。ももとのルーツは、上の写真の井戸の付近であろうか。しかし、予想に反して昔からの家々の街並みをなく、杜が開発されて新たな建物ができ、昔からの御嶽がわからなくなっていた。

かつて、ここに暮らした人は、もういない。盛加がー(むいかがー)という井戸に水を汲みにきて、その横の御嶽を拝んだ人びと... どこに行ったのであろうか。

盛加が井の東にあるテラフグ御嶽あたりに与那覇原という団地の拠点があったと考えられているが、そのテラフグ御嶽が開発でわかりにくくなっていた。(写真左)

多良間島で「与那覇せど豊見親のにーり」が唄われ、八月踊りで黄金三つ星が唄い踊られている。多良間に事情でやって来てふるさとを思い歌った可能性があるのかもしれない。

(3) 認知天文学的な分析・考察

① おおぐま座 α β γ δ ϵ ζ η を事例として星の名前から認知の分析を試みる

星の名前から認知を分析・考察することができる。その認知には、大きく分けて次のように星の特徴にもとづくものと、暮らし(生活)にもとづくものがある。

(a) 星の特徴にもとづくもの・・・星の数。形状。方角。明るさ等

(b) 暮らし(生活)にもとづくもの・・・農具。漁具。生活道具。信仰等

おおぐま座 α β γ δ ϵ ζ η を事例として考えると、上記(a)星の特徴にもとづく数の認知が名前に反映された「ナナツブス」と(b)暮らし(生活)にもとづく生活道具の認知が名前に反映された「シャツブス」の二種類の形態の認知が多良間島には見られた。

② 生活での名前とニーリでの名前の認知の形態の相違—ウプラクーラ、シェーカブスを事例として

明けの明星の場合、暮らしのなかでは、シェーカブス、ユアキブスが用いられていた。しかし、「与那覇せど豊見親のにーり」においては、ウプラクーラが用いられていた。

ウプラクーラについては、ウプラは大浦、クーラは小浦(注:平良の地名)である可能性があるが、意味は確定できていない。宮古島においてウプラウサギ、ウプラブスを記録しているもののウプラクーラは現時点では記録できていない。「与那覇せど豊見親のにーり」の時代(14世紀?)の頃に使用された星名であろうか。「生活における認知にもとづく星名」と「文化として世代を越えて伝えられているニーリ」とは異なる認知の星の名前が用いられていた可能性がある。

3. 今後の課題と新たな試み

ネフスキーは、1922年(大正11年)、1926年(大正15年)、1928年(昭和3年)の3回に渡り宮古島を調査し、数多くの星名を記録した。ニコライ・A.ネフスキー著、平良市教育委員会編『宮古方言ノート上』には、次のような星名が記録されていた[6]。

・ビキラブス bikir'a-busi 男子星ノ意。牽牛星。biki-r'a: 男子 p113

・ブナラブス bunar'a-busi 女子星ノ意。織女星。bunar'a: 女子 p125

一方、南琉球宮古語多良間方言辞典に、次のような星名が記されている[7]。

・ぶなり° ぶす[buna|busɿ][名][ぶなり° ぶすまい...]

織女星。織姫星。【類】「みがぶす」。

今回の現地調査では記録できなかった星名であるが、ネフスキーも多良間島を訪れており、多良間島にてブナラブスを記録した可能性がある。

宮古群島は、多良間島、宮古島、池間島と各地域によって方言が異なる。たとえば、明けの明星は多良間ではシェーカブス、宮古島ではシャーカブスである。

今後も現地調査、文献調査により、記録を続けていきたい。

なお、本調査を実施するにあたって宮川耕次氏、友利健氏、多良間村教育委員会の桃原氏をはじめ多くの人の貴重なアドバイスをいただいた。また、昔の記憶をたどって語ってくださった話者のひとりひとりにお礼を申し上げる。

参考文献

- [1]北尾浩一「アンケート調査による南西諸島の星の民俗」『天界 1984 年 3 月』東亜天文学会、1984、p.67-69。
- [2]稲村賢敷著『宮古島旧記並史歌集解』琉球文教図書、1962、p.393-401。
- [3]北尾浩一『日本の星名事典』原書房、2018、p.92。
- [4]北尾浩一「天文民俗学試論(184)」『天界 2021 年 3 月』東亜天文学会、2021、p.81-83。
- [5]渡久山春英、セリック・ケナン『南琉球宮古語多良間方言辞典』国立国語研究所、2020、p.250。
- [6]ニコライ・A. ネフスキー著、平良市教育委員会編『宮古方言ノート上』(平良市教育委員会、2005)
- [7]前掲[5]、p.437